

日常よく遭遇する甲状腺機能低下症 ～その考え方と治療について～

済生会横浜市南部病院外科 (甲状腺)、甲状腺センター センター長
平川 昭平氏

共催：神奈川県保険医協会／あすか製薬㈱

【はじめに】

甲状腺疾患はその臓器特異性により、内分泌腺としての「甲状腺機能異常」と臓器そのものの病変である「結節性病変」という二つの特徴がある。両方の特徴を有する疾患もあるが (例えばPlummer病等)、多くはそれぞれ独立して存在している。

その特異性を理解しながら日常診療を行っていく必要があるため、診断や治療に難渋すると感じてしまう医師が少なくないようである。

また、「甲状腺機能異常」は内科的、「結節性病変」は外科的であるため総合的に診断と治療を行うには、両方の知識が必要であることもそのように感じさせてしまう一因かもしれない。しかし、甲状腺疾患は日常診療で、比較的よく遭遇するためその病態を理解しておくことは重要であると考えられる。

今回はそれら疾患のうち、日常よく遭遇する甲状腺疾患としての甲状腺機能低下症を中心に講演する予定である。

原因

甲状腺機能低下症の原因はおおきく分けて原発性と中枢性がある。

原発性は甲状腺そのものが原因となるものでその代表が橋本病である。その他先天性疾患、無痛性甲状腺炎や亜急性甲状腺炎の一時期等疾患によるもの、ヨード過剰摂取、手術や放射性ヨード治療後、薬剤性といった医

原性のものがある。

中枢性のものは下垂体腫瘍や頭蓋咽頭腫に代表される脳腫瘍等により引き起こされたものから、手術や放射線治療後といった医原性によるものまで様々であるが多くは他の下垂体機能異常症も伴っている。

日常診療で一般的に遭遇するものほとんどは原発性であり、その原因のほとんどは橋本病であると考えられる。

症状

無気力感や易疲労感、眠気といった「不定愁訴」ととらえられるような症状や体重増加、便秘、寒がり、眼瞼浮腫等多様である。これら症状から甲状腺機能低下症を推測することは必ずしも容易ではない。的確に診断を得るためには甲状腺機能検査が必要となる。

検査

甲状腺疾患の診断において触診はもちろんのこと、現在、必須であるものは超音波検査と血液検査 (甲状腺機能検査) である。

超音波検査は結節病変のみではなく、びまん性甲状腺腫や橋本病といった腫瘤を形成しないものも診断可能である。侵襲もなく手軽に行えるため甲状腺疾患を疑った場合に一度は行っておく必要がある。

血液検査は一般生化学的異常に加え甲状腺機能の異常、抗体の検出に重要である。最近では検診やドックでの一般採血の結果か

ら、甲状腺疾患を発見される例もよく目にする。特に甲状腺機能低下症についてはT-Cho、LDLの上昇といった脂質代謝異常、AST、ALT、LDH、CPKの上昇により甲状腺疾患の存在を疑い診断に至る場合もある。

しかし、軽度の機能低下症では必ずしもこれらの値と相関しないため甲状腺機能検査、抗体検査は診断および治療をする上で必須となる。

診断

甲状腺機能検査ではTSH、FT4、(FT3)により診断する。機能低下が確認された場合、その原因を検索することが重要である。すなわち永続的に低下症となる疾患なのか、一過性の低下をきたす疾患であるのかである。

前者では橋本病の病態に加え、甲状腺全摘後、RI治療後といった医原性のものも含まれる。後者には無痛性甲状腺炎や亜急性甲状腺炎の一時期、ヨード過剰摂取などがあげられる。

それらの診断、特に橋本病の診断では抗サイログロブリン抗体 (TgAb) や抗甲状腺ペルオキシダーゼ抗体 (TPOAb) といった各種抗体測定や、超音波検査所見が診断の一助になる。

治療

甲状腺機能低下症は大きく顕性機能低下症と潜在性機能低下症に分けられる。顕性機能低下症はすべて治療対象であるが、潜在性機能低下症については多くの検討の結果、TSH>10 μ U/mlに対しては治療の対象とされている。しかし、それ以下 (5~10 μ U/ml) に対しても治療対象としたほうがよいという報告も見られ一定の見解は得られていない。

治療は甲状腺ホルモンの補充療法であり、一般的には合成T4製剤である、レボチロキシナトリウム錠を使用する。通常は少量から開始し2~3週間かけて徐々に漸増し血中ホルモンレベルを基準値に保つことを目的

とする。

しかし、甲状腺癌の術後や妊娠時のように特殊な環境下ではこの目標値と異なることもあり注意が必要である。それらの点についても解説する予定である。

【おわりに】

甲状腺疾患は、女性の10人に1人は何らかの甲状腺異常をもつといわれるほど頻度の高いものである。

今回与えられたテーマは「甲状腺機能低下症」であるが、その知識だけでは当然甲状腺疾患をすべてとらえることができない。しかし機能低下症が日常で一番よく遭遇する疾患であるのも事実である。そのため、本講演が少なくとも日常よく遭遇する疾患としての甲状腺機能低下症について基本的なことから日常診療の理解の一助になるようであれば幸いである。

